慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・シュレベッカー著 アメリカ農業史 ; デイヴィド・スコープ著 アメリカ中西部の農業労働者
Sub Title	John T. Schlebecker, Whereby we thrive : a history of American farming ; David E. Schob, Hired hands and plowboys : farm labor in the Midwest
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.4 (1976. 4) ,p.221(91)- 224(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19760401-0090
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760401-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

情だけでなく，職場における職制にたいする労働者集団の連帯を強く感じさせる言葉である。だが，それにもかかわらず，筆者は労働者階級の中産階級との深い断絶を意識させる表現として，そうした階級的支配と被支配の感情の根底にあると思う。それはやがて「やつら」か「おれたち」か，に発展する契機をひそませており，自己の属する階級と他の階級との相違の意識，これこそが，日本の労働者にもっとも強く欠けている点ではなかろうか。

'Them' and 'Us' を意識しない日本の労働者は，どのような頽敗が自己の企業を蔽おうとも固い沈黙を守り，わがことのように，企業の利益を守ろうとする。イギリスの労働者階級や労使関係だけでなく，こうした企業別労働組合のもつ弱点を知るために，この二つの研究は必読の書であり，一読をすすめたい。

飯田　鼎（経済学部教授）

ジョン・シュレベッカー著
『アメリカ農業史』

デイヴィド・スコーブ著
『アメリカ中西部の農業労働者』

ここに紹介する二冊の本は，いずれも，アメリカ農業史研究者にとって待望の書であった。待望の書という意味は，かかる書物の必要性を誰もが感じていたにもかかわらず，これまで類書が存在しなかったからである。期待が大きかっただけに，読み終っての正直な感想として，いささか不満が残る。しかし，これは著者の力量の不足からくるものというよりは，彼等の課題の困難さを示すものというべきであろう。

シュレベッカーの書物は，1607年（ジェイムズタウン植民地の建設）から1972年にいたるまでの，アメリカ農業史の通史である。これまで存在する概説書は，ビドウェルおよびファルコナーの『北部農業史』，グレイの『南部農業史』をはじめとして，ゲイツの『農民の時代』やシャノンの『農民の最後のフロンティア』など，極めて質の高いものではあるが，その対象とする地域や時代が限られていた。また，ラースムッセンの『アメリカ農業の歴史』は，資料集であって通史ではない。いわば唯一の通史は，1940年の農務省年報にのせられているエドワードの『アメリカ農業——最初の300年』ということになるが，その後の研究の進展を考えると，今日では少々物足りない。それ故，先に優れた文献目録（*Bibliography of Books and Pamphlets on the History of Agriculture in the United States, 1607-1967*）を出版したシュレベッカーの本書が待たれていたわけである。

一方，スコーブの書物は，1815年から1860年にいたる時期の，中西部の農業労働者を扱ったものであって，シュレベッカーのそれとは対照的な個別研究である。しかし，類似の研究書がないという点では，これも同様に貴重な書物である。南部の黒人奴隷については多くの研究がなされているが，北部の農業労働者に関しては，不思議に研究がない。もちろん，農業労働者が存在したことは前記ゲイツの書物をはじめ，ダンホフの『北部農業史』や，ボウグの『中西部農業史』にも記されているのであるが，その実態は全く不明であったといってよい。これは，北部農業が独立農民もしくは家族農場を中心に営まれていたという事情（ないしは神話）に加えて，労働者に関する史料が極めて限ら

れていたためであろう。もっともスコープは，雇い主側の史料のみならず，労働者の書いた手紙や日記を掘りおこしたのであって，「叩けよ，さらば開かれん」の感がある。

さて，最初にシュレベッカーの『アメリカ農業史』を見よう。この書物は，大きく5つの時期に区分されている。すなわち，植民地時代(1607～1783年)，独立から南北戦争まで（1783～1861年)，第1次大戦まで（1861～1914年)，第2次大戦まで(1914～1945年)，第2次大戦後(1945～1972年)の5時期である。さらに，それぞれの時期が，土地，市場，技術という3つのトピックを中心に分けられている。例えば，植民地時代については，1. 農業のための土地(1607～1763年)，2. 土地と独立戦争(1763～1787年)，3. 農業技術と農具（1607～1783年)，4. 市場を求めて（1607～1783年)，5. 重商主義と農民(1607～1783年)という5章がある。

各章は，次いで1ページないし2ページ程度の小トピックに細分されている。第1章の場合を例にとれば，ヴァージニア植民地，プリマス植民地，ジョージア植民地，その他の植民地，北アメリカのオランダ人，タウン・システム，タウンの土地付与，その欠点，兵士への土地付与，イギリス植民政策の変化，といった具合である。もとより，この程度のページ数であるから，そう詳しい説明を期待することは無理であるが，個々の事項に関しての一応の知識を得ることはできる。ただし，あくまでも教科書的な叙述であるので，特定の問題をめぐる論争点などは述べられていないことが多い。また，巻末の文献目録は，ごく一般的なものに限られているので，細かな問題について，どんな参考文献があるのかということも解らない。ただし，この点については，先に記した通り，シュレベッカーによる別の書物があるので，そちらの方を参照すべきであろう。

シュレベッカーの叙述は，土地，市場，技術という3つのトピックを中心に展開されているが，より包括的なテーマは，商業的農業の発展ということである。もっとも，商業的という言葉は，生産物の販売が，たとえわずかであってもおこなわれるという意味で使われているので，かかる用語法からすれば，植民地時代以来の歴史は，すべて商業的農業の歴史ということになる。それ故，かつてビドウェルが問題とした，自給的農業から商業的農業への変化というような観点は入ってこないし，まして南部プランテーションの性格規定などは問題とされない。土地，市場というトピックにしても，農村構造や市場構造とは無関係であって，そうした面に関心を持つ読者には不満が大きいと思われる。例えば，独立から南北戦争までの期間における土地および市場の問題は，公有地政策の変遷と領土の拡張，貿易，工業の発展，交通機関の改善といった面を中心に記述されており，無難といえば無難，つまらないといえば，つまらないというところである。

通史あるいは教科書としての性格を意識しすぎたためか，シュレベッカーは，アメリカの学界で論争の的になっているような問題を，あえて避けているように思われる。南北戦争前のプランテーションの自給性の問題，地域間交易の問題，ホームステッド法の評価，農民運動の原因等々，経済史家であれば当然一言あってしかるべき問題について，シュレベッカーは，ほとんどふれていない。ふれているとしても，それが問題となっていることを，読者に気付かせないような書き方しかしていない。これは，彼がスミソニアン博物館の農業・工業部門の責任者であることと，無関係ではあるまい。彼の記述は，博物館の展示品の如く，公正中立，無味乾燥なのである。もっとも，最近は教科書と銘打ちながら，妙に論争的なものも少なからず見受けられるので，これは一服の清涼剤といえないこともない。

それでは，シュレベッカーの書物の長所はどこにあるのか。この点は，彼が博物館に勤めていることに大いに関係があるが，農機具や農業技術についての記述が極めて明快で解りやすいことである。これには，多くの写真や図版も大いに物をいっている。シュレベッカーの関心が，どんな点に向けられているかは，索引を見れば良く解る。そこには，プランテーションという項目はないが，プランター，すなわち種まき機は存在する。また，ポピュリストの指導者であったブライヤンの名前はないが，酪農業におけるバブコック・テストの発明者，バブコックは存在するといった具合である。もちろん，技術は，より大きな社会的，経済的文脈の中でとらえられなければならない。しかし，収穫機やトラクターの改良発達の過程，病虫害対策や品種改良，土壌保全や灌漑についての具体的知識なしに技術を語ることはできない。こうした点で，この書物は極めて有用である。

また，この本が読んでつまらないかといえば，決してそうではない。「ジョージ・ワシントンは，所有地から無断移住者を追い出すことに成功した数少ない土地

所有者・投機業者の1人であった。彼の土地に対する権利を確保するにあたり，革命の英雄としての名声が大いに役立った。ほとんどの投機業者は，それほど成功をおさめなかった」(57ページ)というような記述からも察せられるように，シュレベッカーの書物には，コショウもきかしてあるのである。

次にスコーブの著書を紹介しよう。この書物の最大の功績は，南北戦争前の北部，より正確には中西部農業を考えるにあたって，農業労働者の存在を無視することはできない，という事実を明らかにした点であろう。北部農民が自給的であったという神話は，ずっと以前に消滅し，そのことはシュレベッカーの通史においても当然の前提とされている。しかし，労働者が例外的存在であったという印象は今日もなお強い。スコーブは，中西部農業の発展にとって，農業労働者の存在が不可欠であったことを示すと同時に，児童労働者，家事手伝いとしての女子労働者の役割りを明らかにし，さらには自由な黒人労働者が中西部の農場で働いていた点をも指摘している。この書物は，北部農業についての，もう一つの神話を打ちやぶる足掛かりを提供したといえるであろう。

内容構成は序論につづき，農場建設，プレーリー開墾，運送，収穫，排水および井戸掘り，園芸および果樹栽培，冬期の仕事，児童労働者，女子労働者，労働者の地位，労働者の休日，結論という13章からなっている。前半では，それぞれの作業における労働者の雇用と役割り，後半では農村社会における労働者の状態が示されているといってよい。史料は，農民の日記，書簡，地方史，新聞等々であるが，歴史家が使いなれていた，これら史料の中に，農業労働者に関する材料が，かくも豊富に存在していたのかと，あらためて目をみはるばかりである。

収穫の季節に，家族労働だけでは人手が足りないので労働者が雇用されるということは，従来からもいわれていた。しかし，そのような短期間だけ，突然，労働者が天から降ったか地から湧いたかのように出現するというのは，いささか解せない話である。スコーブによれば，労働者の仕事は，ほかにもいろいろあった。例えば，家屋の建設は，すべて近隣の住民の協力によるわけではなく，労働者によることも多かったし，プレーリーの開墾にしても同様である。農産物の運搬についても，それに従事する業者および労働者が存在していた。収穫期には，移動労働者だけでなく，町の労働者や，黒人も雇用された。また，排水溝や井戸掘りには，専門の労働者がおり，これにはアイルランド移民や黒人が従事した。果樹園では，主に外国移民の半熟練労働者が働いていたし，冬期には伐木に，あるいは豚肉加工に労働者が雇われた。孤児や貧民の子供は農家に年季奉公にやられたし，数名の労働者を雇う農家では女中も必要であった。とくに収穫期には，主婦の労働が過重になったので，女中が歓迎された。これら労働者の実態を，スコーブは生き生きと描き出している。

とくに興味をひくのは，農業労働者の存在が，都市と農村とのつながりを，思わぬ角度から示している点である。農業労働者は農場でのみ働いているわけではなく，季節によっては都市や運送業で働いており，非農業雇用機会の存在が，彼等の生活をささえていた。さらに，賃金の一部分は現物支給の場合が多かったが，ここで現物というのは農民が支給するのではない。労働者が町の商店で購入し，それが雇い主の農民の掛勘定に加えられるのである。商人・農民・労働者という結びつきの存在は，これまで見逃がされてきた点といえよう。また，中西部の農業労働者が，冬期には南部に出かけていったという点も，北部と南部のつながりを示す点で面白い。

スコーブの書物の弱点は，その史料が多種多様であるため，エピソードの積み重ねの感があることである。まさに，「新しい経済史家」が，昔風の経済史を批判する点である。スコーブは，全体とすると，南北戦争前の中西部においては，労働者が「農業のはしご」を昇って自作農になることが可能であったことを説いている。しかし，スコーブの史料および方法は，それを実証しえない性質のものである。結論の章においてはマニュスクリプト・センサスが用いられているが，これはお義理で使った程度であり，大部分は叙述的史料を伝統的手法で扱ったものといえる。それ故，「社会における労働者の地位」という章では，労働者が雇い主の娘と結婚することもあったということが，彼等の「地位」を示すものとされる。これでは，社会史家といえども満足できまい。

むしろ，結論の部分をもう少し拡大して，特定のタウンシップなり，郡なりにおける農業労働者のあり方を探ることの方が，労働者の地位や「農業のはしご」説を考察するためにも，適切ではなかったかと思われる。中西部というような大きなワクではなく，限定された小地域であれば，エピソードも，単なるエピソー

ド以上の意味を持ちうるからである。スコーブの叙述は，ミシガンからイリノイへ，オハイオからウィスコンシンへ，という具合に目まぐるしく飛ぶので，平均的賃金であるとか，賃金の上昇傾向であるとかいわれても，どの程度の平均か，傾向か，はなはだ頼りない。

しかし，難点はともかく，これだけ多くの史料を集め，農業労働者の実態を，作業内容のみならず，日常生活全般にわたって明らかにしたことは，スコーブの書物の大きな貢献である。時には，材料が豊富すぎて，まとめにくかったのではないかとすら思われる。しかし，これまで誰も注目しなかった史料ばかりであるから，スコーブにしても捨てきれなかったに相違ない。引用が多すぎたり，長すぎたりする感じを持つ読者もいようが，これも仕方のないところである。

以上，性質は異なるが，それぞれに新分野を開拓した二冊の書物を紹介した。アメリカ農業史研究者のみならず，アメリカ史一般に興味を持つ人々にとっても見逃しえぬものと思う。

〔John T. Schlebecker, *Whereby We Thrive: A History of American Farming, 1607-1972.* Ames, Iowa, Iowa State Univ. Press, 1975, 342 pp. 邦価 4,790円〕

〔David E. Schob, *Hired Hands and Plowboys: Farm Labor in the Midwest, 1815-60.* Urbana, Univ. of Illinois Press, 1975, 329 pp. 邦価 4,050円〕

岡田 泰男（経済学部教授）

J. S. ニカーソン著
『マルサス礼賛』

Jane Soames Nickerson with an introduction by Russell Kirk

"HOMAGE TO MALTHUS"

1

マルサス人口論復活の声が（とりわけ第2次大戦後）跡を断たない中で，先年（1974年）ルーマニアにおいて第3回世界人口会議が開かれ，その声はさらに一段と高まってきたようである。

ところで人口論ないし人口問題については，以前からあまりにも多く語られてきた。戦後に注目してみた場合，欧米文献でその代表的なものは，W. Vogt: Road to Survival, London, 1949., K. Smith: The Malthusian Controversy, London, 1951., J. A. Banks & D. V. Glass: Introduction to Malthus, London, 1953., G. Mackenroth: Bevölkerungslehre, Berlin-Göttingen-Heidelberg, 1953., 等々で，これらを皮切りに，人口問題は人口理論の立場から，あるいは社会学の立場から，あるいはまた通俗的な警告の立場から論ぜられ，現在までにこの種の文献は相当な数に上っている。しかし「マルサスは誰も読まずして皆が酷評する本を残した」（J・ボナー）と言われているように，現代の人口問題に関する多くの主張は，内容的にはマルサスそのものから遊離してしまった感がある。

本書も，やはりマルサス人口論の復活という時流に乗って，現代世界の直面している人口過剰問題にメスを入れようとするものである。

著者ニカーソン女史については詳しいことは解らないが，本書に記された著者紹介をそのまま引用すれば次の通りである。「オクスフォードで学び，現在ニューヨークに在住。数年フランスに住み，そこではロンドンタイムズのパリ支局のスタッフとして働いた。そしてフリーのジャーナリストとして，現在まで北アフリカを広く旅行してきている。その出版著作は次の通りである。The English Press; A Short History of North Africa; Autobiography of Marie Avinoff (with Paul Chavchavadze)；その他フランス及びイタリアの書物の翻訳」。

ところで本書の特徴とするところは，単に現代の人